

津田秀夫文庫文書目録4

松代藩真田家大坂御用場関係文書について

藤尾 隆志
藪田 貫

一 はじめに

津田秀夫先生の収集した文書群の大半は、村方文書である。それも、目録第二号で紹介した桑津村をはじめ、先生がフィールドとされた摂津・河内・和泉の三方国、現在の大阪府下の村々に関わるものが圧倒的に多い。その傾向は、寄贈文書を受託し、整理の労をとられた大阪市史編纂所による仮分類によっても、また、関西大学文学部古文書室での再整理と目録化によっても明らかである。ところが詳細に目録を取っている段階で、村方文書とするよりは、あらたに主題を取って一括したほうが適当と思われる文書群が出てきた。今回、紹介する松代藩真田家大坂御用場関係文書は、その一つである。

後述のように松代藩大坂御用場の設置にあたっては、河内丹北郡別所村（大阪府松原市）の豪農中山善右衛門が資金提供をし、史料中にその名前が頻出するので、同家文書とまでは一つであった可能性が高い（これらは整理箱④・⑤に分類されている）。しかしながら津田文庫文書に

ついては、原秩序を復元することが不可能で、その可否を判定することは出来ない。したがって新たに秩序をたて、主題を取って一括し、紹介するほうが、利用者の関心と便宜のためにもよいだろうと考え、ここに紹介する次第である。別所村文書については、追って別途、紹介の予定である。

さて松代藩は、いうまでもなく信州松代に本拠を置く真田家で、真田信之（信幸、一五六六―一六五八）を初代藩主とする石高十万石の外様大名である。関が原の合戦に際し信之は、父昌幸・弟幸村と分かれて徳川方に属し、戦後、家康から九万五千石を与えられ、信州上田の城主となった。元和八年（一六二二）、酒井忠勝に代わって松代に入り、石高も加増され、十三万石（松代十万石のほかに田沼三万石があったが、継嗣がなくのちに没収された）となった。以後、廃藩置県まで十代を数え、なかでも八代目藩主幸貫は老中に就任、佐久間象山を登用するなど幕末の政局で活躍した。

松代藩真田家については、つとに国立史料館所蔵真田家文書として知

られた文書群があり、詳細な目録が史料館から出版されている。⁽²⁾ そのなかにも「大坂御用場」の項目が立項され、関連史料が収められているが、ここに紹介するのは現地大坂と河内に残された史料である。

松代藩の御用場および蔵屋敷については、すでに植松清志・谷直樹氏の研究がある。⁽³⁾ 両氏の研究は、慶応三年（一八六七）以降の蔵屋敷設置に重点が置かれており、それ以前に置かれていた御用場についてはあまり触れられてはいない。しかしながら、①安政元年（一八五四）に内平野町二丁目の懸屋敷（炭屋孝七所持、津国屋友七支配）に御用場が設置され、さらに文久三年（一八六三）、網島町の懸屋敷（白山彦五郎所持、重兵衛支配）にも御用場が設置され、両者が同時に存在し、そこに松代藩の役人が詰めていたこと、②懸屋敷所持者の炭屋や山家屋（白山彦五郎）らが館入として、同家の「金主」「銀方」「銀主」となっていたこと、③明治三年までに網島町の御用場は引き払われ、内平野町の炭屋の御用場も同年、引き払われたことを指摘するなど貴重な研究となっている。

それに対し当文書群では、真田信濃守の御用場所在地を「天満船大工町」とする史料があり、前記の二つ以外にも松代藩が御用場を保持していた可能性がある。

また『長野県史』第六巻（一九八九年）によると、松代藩は八代幸貴の時に専売制を実施しようとした結果、三都（江戸・京・大坂）大資本との従属関係が進んだとされ、この頃、大坂とのつながりが深くなったと思われる。またさらに嘉永元年（一八四八）、薬用品になる杏仁・甘草を専売品として炭屋彦五郎に捌かせようと計画したことがある。これ

は結局、失敗に終わったが、松代藩と炭屋との関係を知ることができる先駆的事例と言える。炭屋の名は、後続の史料のなかからも確認することができる。

いずれにしても本文書は、御用場の設立経緯を知るうえで有益なものである。

全体の目録点数（後掲）は六八点点だが、書き直した史料が多く、また、細かい用語・言い回しなどを変えただけでほとんど内容が同じ史料も複数、残存している（例えば五―一六と五―四八、五―六三。また五―四七と五―五二、五―五七）。いずれも案文とすべきものだろう。年代に関しては多くが不明であるが、年代の分かるものは嘉永三年（一八五〇）―文久二年（一八六二）に及んでいる。したがって本文書は、すべて幕末期のものとしていいであろう。なお松代藩以外にも宇都宮藩に関する史料もあるが、少量のため詳しいことは不明である。

なお今回も、基礎的な文書整理は、古文書室研究員橋本猛氏の手になることを記し、謝意を表したいと思う。

二 文書の解説

つぎに、本文書の具体的な内容について少し触れておきたい。

先述のとおり、真田藩には従来、大坂に蔵屋敷がなく、わずかに加嶋屋又兵衛や炭屋彦五郎と銀主としての関係があったようである。後述の史料①は加嶋屋宛てのものだが、七カ年以前の嘉永五年に家臣の原主米が上坂し、勝手向き借入金について加嶋屋ならびに炭屋と交渉のあった

ことが分かる。その内、炭屋は史料②に「往年甘草差送り」とあるように、専売品の販売先として位置づけられていた。他方、加島屋は「於大坂御用場取建之義は又兵衛殿厚心配」とあるように、真田家御用場の取立てに尽力していた。その加島屋又兵衛が、親類である中山善右衛門を紹介することで、中山家と真田家の関係が生じたようである。具体的には史料③にあるように、御用場設立にあたり中山家に三千両の借金を求めた。この交渉には、真田家を代表して原権右衛門・主米父子が一貫して当っている。

その要請に対し中山家は当初、否定的であったようであるが、松代へ出向くよう求められ、安政六年（一八五九）五月に、中山家の親類として田代庄右衛門（摂津住吉郡我孫子村）が代わって出向き、藩主から家臣一同にまで謁見している（史料②および④）。

ところが大坂では中山家の当主であった善右衛門と、善右衛門の父であり、今回の件に深く関わっていた一治が、同年五月・六月と相次いで病死し、幼年の息子廉太郎を残すのみとなってしまった（史料④および⑤）。そこで中山家には「一治死去後改革中」（史料④）とあるように家政改革の必要が生じ、親類が集ったの鳩首協議となった。突如、真田家への出金計画は頓挫してしまったのであるが、真田家では、翌万延元年（一八六〇）、原父子が上坂、中山家の親類田代家に出張し、約束通り、金三千両の供与を求めた。史料③は、万延元年（一八六〇）閏三月、真田家と中山家親類との間で約定書が取り交わされたことを示す。しかしながら史料④によると、「（文久元）先月二十五日原御親子私宅へ向ヶ御主張二而、当子金子三千両調達致呉度」と中山善右衛門が述べているこ

とからすれば、この約定書は案文で、実際に約定が成立していたかどうかは疑わしい。

史料④にはさらに、中山家側として親類の上田村松川大次郎が立ち、原父子と交渉した件が書かれているが、原は中山家が真田家から扶持を貰っていることを盾に三千両の出金を迫り、対する中山家は、すでに先に銀三〇貫を用立てっており、新たに三千両を出すのは大金のために出來がたいと述べる（銀三〇貫目については、中山家文書に約定書がある。目録参考欄通番1参照）。それについて原は、三〇貫は自分の借用で「旦那（藩主）に関わりない」と返すが、中山家も証文面に「旦那御用場入用」と認めてあると応酬し、一歩も譲らない。焦点はその後、五年後の三千両の出金に移るが、興味深いのは、このような生々しい経緯を記した文書の宛先が、史料④が「御役所」、史料⑤が「御奉行様」となっていることである。しかも④では「御役所へ原様より御願立二相成」「何卒原様へ成行御掛ケ合被成下度」と原との交渉の仲介を求め、口上書の形をとる⑤では「権右衛門殿へ御利解被為 仰付」と原への説諭を求めている。真田家と中山家の間で出金問題が暗礁に乗り上げているのは明らかで、その打開を真田家側の原が、役所ないし奉行所に訴え出たのである。④の日付が文久元年十一月十六日で、冒頭「昨酉十一月二十日御召出シ」とする⑤の日付が、翌二年正月二十四日であるのは、この間の連続する事態を物語っているといえよう。その意味で、役所も奉行所も同一である。

その点を解く鍵が、史料⑥と⑦にある。それは両史料に出る「大須賀」という名前である。大須賀とは大坂町奉行所与力の名で、『御役録』に

その名が見える。したがって原は、大坂町奉行所に訴え、それに中山家が応答している構図が、ここに確認される。文久二年二月十日付と推測される史料⑥において加島屋は、二月七日に「町内付添」で町奉行所に出現、そこで大須賀から、三千両の三分の一か四分の一でも出金しなければ事は済まないだろうと言われ、さらに四分の一の七五〇両から、先に収めた銀三〇貫目に利息を加えて金換算した四五〇両を差し引いた三〇〇両で手を打ってはどうか、それならば「奉行所より松代へ御了解仰遣」と回答があったと記している。

奉行所の仲介をまつて事態は、収拾に向かつていったのである。文久二年の年期末をもつ史料⑦によれば、中山善右衛門と原権右衛門の間で、二〇〇貫目を五年分割にする約定が議論され、さらに史料⑧によれば、それは万延元年閏三月に約定した「金三千両出銀并に用場取立方書付」を改訂したものである。史料⑩によれば奉行の交替が、事態の解決を急がせた要因であるが、たしかに文久三年五月には、大坂町奉行が東西とも交替している。

こうして文久二年に、なんとか中山家からの資金援助の約束を得た真田家であるが、「此頃手元大払底二付」と、中山家の家計も逼迫していたようである（史料⑪）。

なおここに紹介していないが、返済については、元治元年（一八六四）より六カ年に分けて松代藩より渡されることになっていたようである（五一―二四）。

このような松代藩真田家と中山家の応対を示す文書が多いなかで、最後の史料⑬は、原主米から父原権右衛門に出されたもので、真田家側の

金策事情を物語る。文中「於大坂表屋敷取立、追々諸家様並ニ成立可致手段も逸々重役より被申立」とあり、大坂御用場の設置は同家にとって焦眉の課題であったことが分かる。

注

- (1) ⑤の箱には「信州松代真田様 お金一件二付 一切書類入」と書かれた史料もある。
- (2) 史料館所蔵史料目録第五十一集「信濃国松代真田家文書目録（その五）」・史料館所蔵史料目録第五十九集「信濃国松代真田家文書目録（その六）」
- (3) 植松清志・谷直樹「松代藩の大坂蔵屋敷について」『大阪市立大学生活科学部紀要』第四七号（一九九九年）

三 主要文書の紹介

以下に、主な史料を分類番号を付けて紹介する。改行は原文にしたがい、異体字は適宜常用字に直し、また、句読点を付した。年次の推定は（ ）で記した。

【史料①（四―一〇）】

口上覚

去ル七ヶ年前子歳中、忝主米上坂之砌

其許御配意給候、旦那勝手向江借入金之儀

種々差纏之筋義有之、其許ニも数年、右一條ニ付取替金等口々差滞被為迷惑之処、今般右

御頼談向総而復古及御再談候上ハ、銀主取扱已下炭屋彦五郎江之差向ニ准し、其許ニ於而相談向ニ不都合筋無之様可為頼談之条、重役より拙者許容之上出阪之事ニ付、此段御心得、復古之御示談、辱御肝煎可給候、為念以書取御廻申置候、猶其時ニ可及御相談候、已上

安政五年戊午八月十六日

真田信濃守内

在阪

原権右衛門^印

加嶋屋又兵衛殿

【史料②（五一四〇）】

去年中田代庄右衛門様、遠路嚴暑之砌

国元江御越御苦勞被下、其節御同人御承知

被下候通、右ニ而御上初重役并掛役人等迄

一統大慶致シ、尚又今般拙者共上坂被申渡

及御面話候儀ニ御座候、然ル処於大坂表用場

取建之儀者又兵衛殿厚心配致被呉、同人より

被差出候段被申聞候、兼而御承知被下候通、当家ハ

大坂表之取組ハ当節手始之儀ニ而、炭屋彦五郎へ往年甘草差送候以来、當時茂僅之出銀ハ

願置位之事ニ而外二者銀主等無之、一治様

御存命中より御懇意被下、既ニ懸り重役へ者

御細書面も御差出被下候程之御親ミニ相成、此度

愈用場取建ニ罷成候上者、常住之役人も出来

可致義ニ候得者、何卒此上者永久之基相開

申度、重役并拙者共心願ニ付、格別厚御勘考

被下、御相談御頼申陳候儀ニ御座候、猶庄右衛門様

又兵衛殿ニ茂御打合之上可然様、御賢断

可被下渡奉頼候、以上

真田信濃守様之内

申（万延元年）三月

原 主米

原権右衛門

中山善右衛門様

【史料③（五一一一）】

約定書

一金三千両

右者中山善右衛門殿・中山一治殿御在

命御調金可被下引合ニ候処、当善右衛門

御家督後尚及御頼談、今般御請

書御差出被下忝存候、然上者早々

用場取建、其上追々御調金被下度候

別紙ニ泥ミ一時ニ御出金相願候儀者

決而無之候、右拙者へ致御頼談候間

外役人共より御引合申候共、御取合被下

間敷候段致承知候、為後日仍如件

万延元申年

閏三月

原権右衛門印

同主 米印

中山善右衛門殿御親類

田代庄右衛門殿

加嶋屋又兵衛殿

【史料④（五―一五）】

乍恐言上書

一去ル午年中信州松代様、銀子御入用

之筋ニ而大坂加嶋屋又兵衛御差向銀主

被相頼候得共、是迄外諸家様方江取

引ニ而手数相掛り、旁以断申切候処

段々被相頼候得共、何分松代様ハ大坂

表ニ御蔵屋敷も無御座故、承引

致兼候趣断申切候処、加嶋屋又兵衛

信州表江一応御越被下候旨、兼々被

相頼、無扨一治要繁ニ付親類我孫子村

庄右衛門代人差出し、御手堅キ模様

御見請候上者、身分相応之御用途も

可申等之心組ニ而、則庄右衛門去ル末年

五月中ニ罷越候、然ル処松代様より御達シ

ニハ其元帰宅之上、一治江御用達致呉候様

御沙汰ニ付、帰宅之上一治江申聞可仕等之

手筈之趣、当時親類共承り居、然ル所

一治并善右衛門死去、無詮方仕合罷在候

処、昨年来より庄右衛門宅江原御親子様

毎々御出張ニ付、金子三千両用達

致呉候旨善右衛門へ掛ケ合呉候段、頻

被申立ニ付、庄右衛門罷越被相頼

候得共、一治死去後改革中、親類

帶屋栄次郎世話ニ預り候程之

成行ニ付、出銀難出来趣申切、然ル所

庄右衛門被申候ニハ、私宅へ原様御越し

御逗留故困り入候由、何分聊ニ而茂

出銀之廉被相頼、無詮方外方

ニ而借用仕、銀拾五貫目御調達

尚又其段拾五貫目都合銀三拾貫目

無滞調達仕、夫ニ而當時之私手元ニ付

御承引も被成下候様存居候処、当月

先月廿五日原御親子私宅へ向ケ御出張ニ而
当子金子三千両調達致呉度段

左も無之候而者国元へ申訳も無御座
且ハ身上ニも拘り候義ニ付、何分調
達御頼ミ御座候得共、親類共一統

打寄示談仕候処、親類直々

原様へ御掛ケ合申上候而者如ケ敷

等存、則上田村松川太次郎参り

居候ニ付、同人へ相頼前書申上候

通、改革中之末始柄相咄シ掛ケ

合貴候処、何分是迄御扶持御下

有之故、是非共三千両用達御申

被成候得共、大金之事故難出来

且ハ御扶持頂戴仕候故、先達而

乍聊銀三拾貫目御用途申上候

処、右銀子ハ拙者借用旦那ニ

拘り候事ニハあらじ御仰候得共

証文面ニ旦那御用場入用等御認メ

御座候故、松代様之御用達与差

心得候段、松川太次郎より申上呉

左候ら得者調達弥々難出来歟

尚又五ヶ年先ニ而三千両用達

可致呉歟、兩様親類懸ケ合之上

答可致呉段、松川太次郎原様より

御申諭ニ付、親類共色々示談仕

候得共、改革行届五ヶ年先ニ而三

千両御用達出来候得も都合能候

得共、何分五ヶ年先之儀ハ見留メ

茂相訳り不申、先一治約定仕置

候哉不存候得共、同人義死去有之

候而も右様手強ク御引合ニ相成候事

故、書類等差上置候而、後日其節

ニ至り御用達出来不申候筋者

迷惑難渋仕、相続方差障り

成行候而者等存、親類一同治定

ニ付兩様共断申張候、然ル処

御役所様へ原様より御願立ニ相成

候ニ付奉恐入候、何分前頭(件カ)之末始(マデ)

ニ付不得止事奉申上候、何卒

原様へ成行御掛ケ合被成下度

段、乍恐手續書以御願

奉申上候、以上

文久元酉十一月十六日

中山善右衛門

御役所

【史料⑤（五一・一六）】

乍恐口上

秋元但馬守様御領分

河州丹北郡別所村

善右衛門

病氣ニ付代

一昨酉十一月廿日御召出シ被為成下、信州松代真田信濃守様御家中原権右衛門殿より頼段在之御扶持被下、代人

信州松代江罷下り、殿様御目通被仰付、然ル処

出銀被不申候ニ付帰国難被成段被願上、私共御召出シ被為成始末御糺被仰付奉恐入候、右始末

乍恐左ニ奉申上候

右頼段被致候先之代善右衛門儀者去未五月

死去仕、引続同人父一治儀も同年六月病死仕

跡相続人廉太郎儀者幼少ニ而、家名相続難出来

無拠同人成人迄「（貼紙）分家より相続仕候へとも」

「（貼紙下）分家又右衛門相続仕候得共」家

事向取締改革等、親類栄次郎相頼罷在候仕合

右兩人死去後ハ、諸家様より御下ケ銀一向無御座

五年延引六年延引杯被仰出、御領主様江者

先代より御勝手御用被仰付候得共、不融通ニ而是等も

御断申上、其上他借等も多分在之、誠ニ一統心痛仕候

「（貼紙）右仕合ニ付追而」「（貼紙下）猶又先善右衛門」儀も多病ニ而昨十二月退身仕、分家

定右衛門改名善右衛門、私当時相続仕候得共、是迄

之通、家事向萬端取締親類之世話ニ相成、未タ

難洩仕居候得ハ追而改革相立、耽与取締出来候上ハ

身分相応之出銀も可仕心組ニ候得共、当節ハ聊

之調銀も出来不申仕合ニ御座候、何卒此段御憐察

被為、成下候様奉願上候、右之仕合ニ御座候得とも、

度々厚御利解被為、成下奉恐入候間、是迄

御用達申上候銀三拾貫目「御証文ハ」献上仕。御用場家屋敷

買入候内実加嶋屋又兵衛口入ニ而外方より出銀ニ相成御座候間、同人

江相渡可申候」

「御用場家屋敷御約定通私へ申受、御帰路為手当金三拾兩

御用達仕候間」何卒格別之御憐愍ヲ以、権右衛門殿江

御利解被為、仰付一ト先御帰国被致候様被為

仰付被為、下置候ハ者、御慈悲難有仕合奉存候

乍恐此度書付ヲ以奉願上候、已上

文久式戌年正月廿四日

代

大久保加賀守様御領分

摂州住吉郡我孫子村

庄右衛門

病氣ニ付代

天満船大工町

讃岐屋卯兵衛借家

加嶋屋又兵衛

御奉行様

【史料⑥（五一二〇）】

（表書）

「山中栄次郎様

御直披極内用

加嶋屋

又兵衛」

以手紙奉申上候、春氣退兼申候へとも

弥御勇健可被成御座、珍重御儀

奉恐賀候、然ハ松代一件、去ル七日召出シ

町内附添罷出候処、大須賀様被仰聞候

三十貫永上納杯ニ而ハいかぬ、申立候三千

之内三ヶ一或ハ四ヶ一二而も出金致し候欤、若夫も

出来ぬなれハ日延致し、松代表江庄右衛門参り

断申立、権右衛門呼下しニ相成候様可致

被仰聞候、此儀松代江無手ニ而参候ハ

とても相済申間敷、又松代江罷出候ハ

不可然、何程逗留末ハ迷惑ニ相成、却而

此上之御難儀ニ可相成候間、愚案仕候ハ

右大須賀被申聞候通、四ヶ一分ニ而

七百五十兩、此内三十貫元利差引メ凡四百五十兩余

残り凡三百兩都合改七百五十兩、此辺之御勘弁

被成下候而、右次第御奉行所より松代江

御利解被仰遣、権右衛門殿呼下し

相成候様御願立被遊候而ハいかゞ、尤右之

金子取引ハ炭屋彦五郎方江松代

御役人、例年十二月用談ニ被参候間、当暮

右御役人御出坂之節御取引被成候筈

ニ而御奉行所江御申立なされ

可然奉存候、私愚案無服藏申上候

余ハ御賢考可被遊候、右内々申上度

いつれの道、右之位御出金不被下候而ハ

相済申間敷奉存候、何分宜願上候、已上

（文久二年）二月十日

【史料⑦（五一八）】

為取替一札之事

（貼紙）

「真田信濃守様御勝手向就、御要用之廉ヲ以

先年古一治存命中御約諾有之

依之、今般銀貳百貫目調達可仕候、乍去

一時二難出来、当戌年より四ヶ年二割納仕度奉存候、則左之通り」

一古一治存命中、御約諾御座候、御勝手向

御用途江此度、改而銀貳百貫目出銀可仕候

乍去連年度々之代替故、私儀家督仕候

以来万事取調中二付、一時二出来難仕二付

左之通割納可仕候

当戌

一銀四拾五貫目

十二月納

内去ル酉年三月調達之分差引申候事、但其節

御差入之五貫目尚又差引残銀貳拾五貫目と月

八朱之利分差引残銀相納申候事

亥

一銀四拾五貫目

十二月納

子

一銀五拾五貫目

十二月納

丑

一銀五拾五貫目

十二月納

(貼紙)

「但御証文者炭屋彦五郎殿出銀之通り

御重役御連判御証文申受候事

右之通、当戌年より丑年迄割納可仕候

為其為取替一札依而如件」

右之通、当戌年より丑年迄二割納可仕候、尚復古

之上者、一治御請之通出精可仕候得共、當時之

所未不行届二付、前段之通御請仕候処、依而

如件

文久二年

戌十一月

閏八月

中山善右衛門印

原権右衛門殿

【史料⑧(五一四三)】

(封)「

中山善右衛門様

原権右衛門

」

朝夕冷氣二候得共、弥御安全

珍重二奉存候、扱又今般差入候

証文、国許役人共連印之

一通持参候処、右文言中

金子之事と有之候処

銀子と認直し候

喜兵衛より申聞候趣、御尤二存候

右は認直し極印二而

御承知被下候者、草間一路

上坂之節迄ニも不及事と
致候得共、同人上坂之砌と
有之候ハ、同人江申談可致候
格段之御趣意有之、文言ニハ
無之認方思違へ而巳之事ニ付
其段御勘考可被下候、殊ニ
草間氏上坂之事も未治定
も無之候得者、上坂之程合も
相訳り不申事ニ付、旁差支ニ
不相成候様致度候、此度早々
如斯御座候、以上

(文久三) 四月十八日

(貼紙)

「本文ニ認候通、金子銀子之認違へ
外ニ疑敷認違ニハ無之間、右を直し
極印ニ而御承知可被下と有之上者
草間氏へ申談ニも不及義、右等之
為ニ兼而私之印鑑、勝手方家老より
御手江相廻候義、曾而疑敷事ニも有之
間敷哉、御勘考可被下候」

【史料⑨ (五―一二)】

以態々便申上候、向暑之節御座候処

弥御勇健可被成御座、珍重
之御儀奉存候、然所此間ハ罷出
拝願奉喜申上候、扨八日後御出坂
可被成下候間、日々御待申上候、右とも
未御出無御座候、別紙小橋屋様へも
申上候通、松代御取引之儀

早々相片付呉候様、原氏より被願出
此程申上候通、御役所よりも御沙汰も

御座候間、乍御苦勞様明日御出坂可被下候
尊台様御六ツケ敷御座候ハ、

岩助様ニ而も御遣し可被下、左も

無之而ハ原氏、明後日尊所様江

直々被参候様子、右様ニ而ハ小橋炭様より

是迄段々心配候処、自然間違

等出来候而ハ不可然奉存候間、何分

明日御出坂被成下、高塚様江も

御相談可被申候、右之段申上度

態々以便如斯ニ御座候、已上

(文久三年) 五月十五日 当賀

加嶋屋

又兵衛

中山御主人様

【史料⑩（五一四一）】

（封）

中山善右衛門様 原権右衛門

向暑ニ趣候処、弥御安全

珍重奉存候、将又此程中被申

越候本証文文字違之處、懸紙

ニて摺印致御承知被下候段、忝

改候、扨又御出張之處、当月晦日迄

喜兵衛迄被申越候段、同人より

申聞候処、右ハ兼々申述候通、先達

中より此度御奉行御代ニ付而、御委く

差急濟方一礼差上候様、大須賀

氏より度々之催促、勿論貴様方へも

沙汰被致候段、其儀も度々催促

ニて、右濟方書面等御同人より被申談

右迄も取急き有之處、尚又当月晦日

迄と有之候而ハ、私方甚以等閑ニ相聞

大須賀氏へ申述方無之、迷惑至極

致、御奉行御代ニ付、尚又差急候様、懇々

被申聞候処捨置候様ニ相聞、迷惑致候

扨又国方へも余り延日ニ相成、其上今度

炭屋方よりも出銀有之、右へ一同差送り

不申候而ハ、是又数日之處、此度後れ

候而ハ甚以不都合至極之儀ニ付、何れ共

御勘被下候而、尚廿日迄ニハ必共御出銀被下度

奉願候、前文之段愈御勘考可

被下候

一 国許役人共印形御引合可被成段

兼々承知致候事ニて、何時成共内平野町

津国屋友七彦五郎方用場守致候間

此方へ御問合御座候、兼々喜兵衛へ

談置候事ニ御座候、尤友七方へも其段

為心得申候ニ付、何時ニても差支有之

間敷事ニ御座候、最早何方も御内談

行届候場ニ付、廿日御取引之處、御館

次第大須賀氏へ可申述候間、何分

此度御勘考被下度、急ぎ使ニ申

伸候、以上

（文久三）五月十七日

【史料⑪（五一三〇）】

然ニ此間中度々御申越被成候ニ付

下拙出坂可致候処、不快ニ引籠

居候付、今日為名代、手代岩介差出候て

申候

一此度忝代四千貫出銀之内ニ而甚以
押付ケ間敷上候、酉戌兩年分私へ
被下之御扶持米代御差引可仕候旨
銀方何程ニ相成候哉、御窺可申候
右御差引之義、早速銀子持参
可致候処、此頃手元大払底ニ付
当月晦日御差引と御頼置
可申上候、右日銀ニ銀子持参ニ而
出坂可致致候、尤当日御証文
御重役御印鑑御引合出来候様
御引合可被下候

イ（文久三年）五月十六日

【史料⑫（五一三二）】

去ル申ノ閏三月中、田代
庄右衛門加嶋屋又兵衛より差出
置候中山善右衛門より金三千兩
出銀并用場取立方之書付
今般改而銀式百貫目年割
出銀之約定分、為取替ニ付
右請分相下ケ度候、且右者
国許江差出置候事ニ付、伺
之上取斗可申候、以上

亥（文久三年）

五月

原権右衛門
中山善右衛門殿

【史料⑬（五一四二）】

（封）

「大坂 廿一日封 江戸廻し

原権右衛門様 松代

用書無別条 原主米
」

今般拙者上坂被仰付候ハ、去暮中
段々及御頼談、幾久敷厚御含被下候
條々申立候処、深御悦被成、尚此上御頼被成度
之旨被仰付候、且又於大坂表屋敷取立
追々諸家様并ニ成立可致手段も逸々
重役より被申立候処、是者尤之手段ニ被思召
兎角一概ニハ大業相成間敷と御合点被成
依之往々之処、大老江御逢ニ而能々御願置
被成度段、被仰出候故罷出候儀ニ御座候、未タ
御若年ニは被為人候得共、政事向深御苦勞
有之、何事も取次之ニ而ハ御不安心ニ被思召
候之処、第一之趣意且又重役初メ掛り之

此度書取得貴意候、已上

原主米

3 津田文庫蔵和漢書目録



松代藩真田家大坂御用場関係文書目録

通番	整理番号	年月日	文 書 名 (摘 要)	作成者・差出人	宛 名	形 態	員 数	備 考
1	⑤-5	嘉永3. 戊3	預り申金子之事(金千両)	真田信濃守内 松本嘉十郎 永井忠蔵 竹村金吾 磯田音 門 恩田頼母(奥印)	大坂 炭屋彦五郎		1 枚	
2	④-10	安政5. 戊午8. 6	口上覚(御頼談一件)	真田信濃守内 在阪 原権右 衛門	加嶋屋又兵衛		1 枚	
3	⑤-10	安政6. 未5	覚(金五拾両利足八朱借用証文)	真田信濃守内 原主米 原権 右衛門	中山善右衛門		1 枚	付箋あり。
4	⑤-49	年未詳(安政6カ) . 5. 10	愚稿(一治病弱忤成人迄出銀御断之事)	未詳	望太夫(望月主水カ)		1 枚	
5	⑤-40	万延元 . 申3	書状(用場取建之義二付願)	真田信濃守様内 原主米 原 権右衛門	中山善右衛門		1 枚	
6	⑤-12	万延元 . 申閏3	約定書 (金三千両 家督後引続き調金願 之事)	原権右衛門 原主米	中山善右衛門親類 田代庄右衛門 加嶋 屋又兵衛		1 枚	
7	⑤-13	万延元 . 申閏3	御請書(金三千両 調金約定書請書)	中山善右衛門親類 田代庄右 衛門 加嶋屋又兵衛	原権右衛門 原主米		1 枚	
8	⑤-17	万延元 . 申5～文久 3. 亥5	大坂天満船大工町家屋敷証文類 勘定書	老松町証人 天王寺屋九右衛 門 船大工町 広嶋屋卯兵衛	我孫子村 田代庄右 衛門	横帳	1 冊	⑤-17・18で貼り付け。
9	⑤-3	万延2. 辛酉3	覚(印形届書)	松代用場取締方 岡金一郎 手塚又兵衛	中山善右衛門			⑤-3と⑤-4は同封。
10	⑤-19-6	文久元 . 辛酉3. 2	覚(金五拾両 証札請状)	中山善右衛門	原権右衛門		1 枚	⑤-19で一括貼布。
11	⑤-7	文久元 . 酉3	添一札(借用銀之内引当差入之事)	原権右衛門	中山善右衛門		1 枚	包紙あり。
12	⑤-18	文久元 . 酉10	覚(金八両也借用証文)	加嶋屋又兵衛	中山善右衛門			⑤-17・18で貼り付け。
13	⑤-15	文久元 . 酉11. 16	乍恐差上書(三千両用達之掛合之事)	中山善右衛門	御役所		1 枚	虫喰あり。
14	⑤-16	文久2. 戊正 . 24	乍恐口上 (相続人幼少ニ付出銀不能之詫 状、原権右衛門へ念達之事)	大久保加賀守様御領分 摂州 住吉郡我孫子村 庄左衛門 (病氣ニ付代) 天満船大工町 広嶋屋卯兵衛借家 加嶋屋又 兵衛	御奉行		1 枚	控虫喰あり。
15	⑤-20	年未詳(文久2カ) . 2. 10	書状(松代御用金利之事 御直披極内用)	加嶋屋又兵衛	山中栄次郎		1 枚	
16	⑤-8	文久2. 戊11	為取替一札之事(調達銀割符之事)	中山善右衛門	原権右衛門		1 枚	
17	⑤-19-5	文久2. 戊12. 晦	覚(銀七百八拾四匁式合請取証文)	桑名屋清兵衛	加嶋屋又兵衛		1 枚	⑤-19で一括貼布。
18	⑤-43	年未詳(文久3カ) . 4. 18	書状(証文認直し之事)	原権右衛門	中山善右衛門		1 枚	包紙あり。
19	⑤-34	文久3. 癸亥4. 21	書状 (証文御認替被下度、原権右衛門へ 返書)	未詳	原権右衛門カ		1 枚	控

通番	整理番号	年月日	文 書 名 (摘 要)	作成者・差出人	宛 名	形 態	員 数	備 考
20	⑤-39	年未詳(文久3カ). 4.21	書状(おきせ殿梅状並びに証文書直し之件)	田中七兵衛	中山善右衛門		1 枚	
21	⑤-36	年未詳(文久3カ). 4.晦	書状(中山様金子証文之事)	小橋屋喜兵衛	手塚		1 枚	虫喰あり。
22	⑤-9	文久3.亥5	一札(銀五貫目銀子差引家屋敷御渡之事)	加嶋屋又兵衛	中山善右衛門		1 枚	
23	⑤-22	年未詳(文久3カ). 5.15	書状(松代御取締之事)	加嶋屋又兵衛	中山御主人		1 枚	
24	⑤-30	文久3.亥5.16	書状(子年出銀の件)	未詳(中山善右衛門カ)	未詳		1 枚	
25	⑤-41	年未詳(文久3カ). 5.17	書状(出銀済方一札二付)	原権右衛門	中山善右衛門		1 枚	
26	⑤-28	年未詳(文久3カ). 5.17	書状(大須賀氏交替済方証文取扱い之事)	未詳(松代用場カ)	未詳(喜兵衛カ)		1 枚	⑤-26～28で一括貼布。
27	⑤-26	年未詳(文久3カ). 5.18	書状(原権右衛門出銀依頼之事)	加又(加嶋屋又兵衛) 小喜 (小橋屋喜兵衛)	中山		1 枚	⑤-26～28で一括貼布。
28	⑤-27	年未詳(文久3カ). 5.18	書状(出金二付御主人様直々御勘考之事)	小橋屋喜兵衛	岩介		1 枚	⑤-26～28で一括貼布。
29	⑤-38	年未詳(文久3カ). 5.21	書状(出銀二付礼状)	原新之丞	中山善右衛門		1 枚	
30	⑤-33	年未詳(文久3カ). 5.24	書状(五貫目証札之事委細面談ニテ)	原	(小橋屋)喜兵衛		1 枚	
31	⑤-37	年未詳(文久3カ). 5.25	書状(出銀二付礼状)	(原)新之丞	(中山)善右衛門		1 枚	
32	⑤-29	文久3.亥5.27	書状(長谷川・草間印鑑引合之事)	中善(中山善右衛門) 岩助	未詳		1 枚	
33	⑤-19-1	文久3.亥5	覚(真田信濃守様の出銀扣)	中山	加嶋屋又兵衛		1 枚	⑤-19で一括貼布。
34	⑤-32	文久3.亥5	書状(金三千両出銀并用場取立方之事)	原権右衛門	中山善右衛門		1 枚	
35	⑤-19-3	文久3.亥5	策四本代轡壺口下緋一七組ノ八両三分 (中山遣配分取替分)	未詳	未詳		2 枚	⑤-19で一括貼布。
36	⑤-19-4	文久3.亥10	覚(金八両也 原氏路用立替)	加嶋屋又兵衛	中山 岩助		1 枚	⑤-19で一括貼布。
37	⑤-19-2	文久3.亥10.29	覚(出銀惣元利ノ八百八拾七匁四分)	中山	原		1 枚	⑤-19で一括貼布。
38	⑤-58	年未詳(文久3カ). 戊3.16	半切渡証文	未詳			1 枚	
39	⑤-1	未詳	印鑑(3枚)	真田信濃守内 原新之丞 御 用場取締 岡金一郎 真田信 濃守名代加嶋屋栄次郎 代判 手塚又兵衛	未詳		3 枚	包紙あり。
40	⑤-2	未詳	印鑑(1枚)	原権右衛門	未詳		1 枚	包紙あり。
41	⑤-4	未詳	本形(印鑑 雛型)	松代用場取締方	未詳		印鑑 1 枚	⑤-3と⑤-4は同封。包紙あり。
42	⑤-6	未詳	一札(借用証文認替之事)	真田信濃守内 原権右衛門	中山善右衛門		1 枚	虫喰あり。

通番	整理番号	年月日	文 書 名 (摘 要)	作成者・差出人	宛 名	形 態	員 数	備 考
43	⑤-11	未詳	覚(借入方返済方 炭屋彦五郎用立金)	未詳	未詳		1 枚	
44	⑤-14	未詳	添一札 (天満船大工町用場家屋敷代銀引当差入之事)	未詳	未詳		1 枚	
45	⑤-21	未詳	仮一札(用場一条取組之事)	加嶋屋又兵衛	別所村 善右衛門 岩助		1 枚	
46	⑤-23	年未詳 .5.15	書状(追啓宇都宮様利足切替)	又兵衛	中山		1 枚	
47	⑤-24-1	年未詳 .11.25	為取替一札之事(銀式百貫目御返済之儀)	未詳	未詳		1 枚	虫喰あり。⑤-24で同封。包紙あり。
48	⑤-24-2	年未詳 .11.25	書状(松代並びに宇都宮一件)	未詳	未詳		1 枚	⑤-24で同封。
49	⑤-24-3	未詳	書状(松代一条並びに宇都宮御貸付一件)	未詳	未詳		1 枚	⑤-24で同封。
50	⑤-25	未詳	約定書(借銀返済之事)	原権右衛門 名代人 加嶋屋 又兵衛 用場取締方 岡銀一 郎	中山善右衛門		1 枚	控
51	⑤-31	年未詳 .12.7	善右衛門殿江被贈候扶持代金一條達書	未詳	中山善右衛門カ		1 枚	
52	⑤-35	年未詳 .3	主米松代表へ罷帰り候付申上候下案 (中山一治国許同道之事)	原権右衛門	望月主米		1 枚	
53	⑤-42	年未詳 .2	書状(出坂ニ付届并国許之委細之事)	松代 原主米	大坂 原権右衛門		1 枚	
54	⑤-44	年未詳 .11.2	口上覚(中山善右衛門申上候一件委細)	原権右衛門	未詳	横帳	1 冊	虫喰あり。
55	⑤-46	年未詳 .3.2	書状(中山善右衛門印鑑引合之事)	酒井市治 野中庄左衛門 宮 澤善治	大坂 津国屋友七		1 枚	虫喰あり。包紙あり。
56	⑤-47	未詳	書状(出銀御用立御断之事)	未詳	未詳		1 枚	
57	⑤-48	未詳	書状(出銀御用立御断之書状草稿)	未詳	未詳		1 枚	⑤-16と類似。
58	⑤-50	年未詳 .6	書状(金三千両御用立之事)	未詳(中山善右衛門カ)	草 一路(草間一路) 長 三郎兵衛 (長谷 川三郎兵衛)		1 枚	
59	⑤-51	未詳	書状(金三千両調達之事)	未詳(中山善右衛門カ)	未詳		1 枚	⑤-50と類似。
60	⑤-52	未詳	書状 (一治死去跡式若年二付出銀御断之事)	未詳(中山善右衛門カ)	未詳		1 枚	⑤-47と類似。
61	⑤-53	未詳	書状案(一治死去ニ付御出銀御断之事)	未詳(中山善右衛門カ)	未詳		1 枚	
62	⑤-54	未詳	半切渡証文	未詳	未詳		1 枚	
63	⑤-56	年未詳 .5.23	書状(用場入用加嶋屋より御取引之事)	()栄次郎			1 枚	
64	⑤-55	年未詳 .5.26	書状(炭彦殿の印鑑引合之事)	未詳	未詳		1 枚	
65	⑤-57	未詳	書状 (一治死去跡式若年二付出銀御断之事)	未詳	未詳		1 枚	⑤-47や⑤-52と類似。
66	⑤-59	未詳	普請仕様書	未詳	未詳		1 枚	控
67	⑤-61	年未詳 .11.朔	書状(金子差引之事)	中山	松代 草間一路		1 枚	控
68	⑤-63	未詳	書状 (真田信濃守御家来原権右衛門頼談之事)	未詳	未詳		1 枚	虫喰あり。⑤-16や⑤-48と類似。

参考(中山善右衛門家文書より)

通番	整理番号	年月日	文 書 名 (摘 要)	作成者・差出人	宛 名	形 態	員 数	備 考
1	35-24	万延2.辛酉.2	約定書(借用銀并用場手当銀相預候事)	真田信濃守 大坂出役 原新之丞 原権右衛門 御用場名代 加嶋屋栄次郎 代判手塚又兵衛 御用場取締方 岡金一郎	中山善右衛門		1 枚	貼付はずれ。虫喰あり。
2	35-25	文久元.酉	仕法帳(勝手方融通借銀調達仕法他)	松代用場	未詳	横帳	1 冊	
3	35-26	年未詳.6.15	書状(書状・持参岩助様御出坂被下度候)	加嶋屋又兵衛 小橋屋喜兵衛	中山 岩助		2 枚	尚々書き貼付はずれ。

注記 本目録は橋本猛氏が作成した仮目録を藤尾が加筆・修正したものである。通番を新たに付し、整理番号は仮目録にしたがった。

例示すれば⑤-5は第5箱の5番という意味である。